

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 318 回 和室の持つ、凄さといたわり

2009.6.28

どうだろう、洋式のシティタイプホテルに2日間連泊すると、落ち着きがなくなってくる。部屋でゆっくり寛ぐ(くつろぐ)なんて気分には、到底なれない。ぼちぼちお歳になったということだろうか、畳の部屋へ戻るとホッとす。靴を履いたまま、いや、スリッパや靴下でさえ脱がないと、リラックスできないのは、典型的日本人の証拠なのかもしれない。

日本人の生活スタイルの変化に伴い、「このままでは和室がなくなってしまうのでは...」と心配されてきた。和室のない生活を送っている人が、以前より随分、増えたようである。でも、小生のように、まだまだ和室の「良さ」を捨てきれない日本人が多いはずである。だから、どんなマンションでも一部屋くらいは和室を作ってしまう事、建築士の先生から、聞いている。

おそらく、日本人にとって、和室は日本的伝統文化と美学観の原点だからと思っている。

例えば、和室を構成する色彩観。(少し専門的で、しかも聞きかじりで恐縮だが)和室の全体を100%として、聚楽壁、天井の板、檜の柱、畳表など視空間の70%が、全部肌色と同じベージュ系で構成されている。これを測定すると、色の反射率が50%となる。実は日本人の皮膚の反射率も同じ50%で、すこぶる「なじむ」。ここに日本人が大切にしてきた空間的「和み(なごみ)」の世界が創造される。従って、特に日本人にとって、和室は、緊張を解きほぐし、気持ちをリラックスさせてくれる、とって居心地がよい空間に感じられるのである。

和室の内装は、色数を減らし、明度や彩度を抑える事によって他の色を引き立てている。つまり、「それ自体を見る色ではなく、他の色を見るための色」すなわち「捨て色」で構成されている。「捨て色」はそれだけで癒しの色であり、寛ぎをもたらし、ストレスを解消させてくれる色でもある。自分の主張をあえて抑え、その存在意義は主役を引き立てること、これが「捨て色」の使命である。

現象的・形而上的感覚しか持ち合わせない人種では、この「配慮の極み」を知るすべもない。感情表現に合わせその都度仮面を取り替える「ギリシャ悲劇」と、一つの面で喜怒哀楽の全てを表現する「能」との比較は、感受性豊かな日本人の特異な文化感であり、この和室の色彩の配慮に通じるものがある。

そして更に、その「捨て色」をまた引き立てる色がある。それは、「ふすま」や「障子紙」の白。白はベージュ系の室内を美しく引き立て、これが息抜きになっている。自然の光を優しく取り入れ、その暖かい間接照明は、心を十分にいたわってくれる。

では「捨て色」の、更なる引き立て役である白は、いったい何を引き立てるのだろうか？

それはたぶん、「和服をお召しになった女性の姿」を美しく見せるための工夫に違いない。ここに輝き放つ「華」があり、だから、和室での女性は、絶対神々しく見えるのだと思っている。

そして床の間や、部屋の上下(かみしも)が創りだす「格式」は日本文化の基調であり、その結果かもしだす美しい振る舞いは、「行動の美学」といっても過言ではない。日本人の生活がカジュアル化され、「格式」が面倒と敬遠され、益してや「差別」なんぞと、とんでもない勘違いを言う無教養な輩が増え出して、畳室(和室)がなくなってしまうたら、日本人の精神的風土である「和の心」が失われる結果とイコールであると思っている。

日本人にとって和室は、そこに帰って行きたいという気持ちを起こさせてくれる、特別な場所なのかもしれない。

いやはや、今回のコラムは、NHK放映の「美の壺」風になってしまったこと、勘弁である。